介護等体験実習の報告

「活発で元気な子どもたち」への「教育的支援」：介護等体験実習（特別支援学校）

瀬川　菜月
（国際言語・文化学科３年）

今回の支援学校での実習では初めての体験ばかりでした。その中で学んだ様々なことの中から２つ述べます。

まず１つ目は、ほぼマンツーマンの体制で、それぞれの子どもに合わせた学習やその他の活動をしているということです。１日目に担当した男児はほぼ全介助のお子さんでした。ことばを明瞭に発することができないために、何をして欲しいのか、私は何をすればいいのかがわからず、結局、私は何もできませんでした。しかし担当の先生にはその子がどうして欲しいのかわかっていて、それに基づいて声かけなどの働きかけをしていました。『どうしてわかるんだろう』と今でも不思議なくらいです。おそらく、毎日、時々刻々、その子の立場から考え、接しているからではないかと思いました。介助をするときには必ず「どっちにする？」と尋ねたり、また何かを落としたりしたときにも子どもから声を発するまで拾い上げることを待ったり、さらにだめなことには「だめよ！」とはっきり伝えたり、あくまで教育的視点を持った対応でした。

２日目に担当したお子さんも身体に不自由がありましたが、ことばや意思ははっきりしていて、「何かして欲しいときにはちゃんと言わないといけないよ」という指導方針でした。それに応えて、子どもはできることには「自分でやる！」、できないことには「お願いします」ときちんと先生に伝えていました。一人ひとりに応じた働きかけ、教育があることを学びました。

学んだことの２つ目は、子どもたちが大変前向きだったということです。特別な支援を必要とする子どもたちに関わったことがなく、『大変そうだな』と同情のような気持ちを持っていました。しかし実際には、不自由があっても、その中で身体を動かしたり、遊んだりすることが大好きで、とても元気で活発でした。また自分ができること、できないことをよくわかっていて、前述のように、「やる！」「お願いします」と、そのお子さんなりの方法で意思表示します。

さらにクラスメイトのこともわかっていて、「下りは歩かない方がいいんじゃない？」などと心配して声をかけ合う場面を見ることができ、『優しいんだなぁ』と感じました。

「障がい」や「支援」への貴重な学びだけでなく、とても可愛い子どもたちと関わることができて、大変楽しく、いい体験でした。ありがとうございました。

笑顔と広い視野：介護等体験実習（社会福祉施設）の報告

白石遼太郎
（史学・文化財学科３年）

とても多くのことを学んだ５日間でした。この実習で学んだことのうち、とくに重要だと思うことが２つあったので、まずこれから述べていきます。

第一に、「広い視野を持つこと」です。すなわち、顔を上げ、全体を眺めて、普段と違うことがないかと周囲を確認するということです。考えてみると当たり前でなにげない動作と心持ちですが、これが非常に重要だと気付きました。私が実習した「高齢者デイサービスセンター」では、利用者さまの様子を遠くから見て何かあれば駆けつけて対応するということが、毎日何回もありました。これは教師としても大切なことだと思いました。なぜなら、教育現場でも生徒の異変を察知し、その場その時に迅速かつ適切な動きをする必要があると思ったからです。

第二に学んだことは「自分から笑顔でコミュニケーションしていくこと」です。すなわち、笑顔は相手をリラックスさせ、警戒する気持ちを軽減させるということを学びました。ぎこちない笑顔しかできなかった実習初日と、うまく笑顔で接することができた実習最終日では、会話の量そのものに大きな差があって、笑顔の力について身をもって実感しました。

ここから、実習５日間を通しての感想を述べます。実習前には「社会福祉」や「介護」について、「お手伝い」「お世話」といった地味で退屈な仕事だと、なんとなくマイナスイメージを持っていました。またこの施設にこの期間、実習生は私一人だと知って、心細さもあり、少し気持ちが後ろ向きでした。しかし、毎日通い、実習を重ねて、利用者さまや職員の方々と仲良くなっていくうちに、マイナスイメージも後ろ向きな気持ちもなくなっていきました。今ではむしろ「また行きたいな」と感じています。デイサービスの仕事と教育現場には共通することが多くあると思いました。実習で学んだことを活かして、自分の夢である教師になることができるように、しっかり頑張ろうとあらためて思いました。

この５日間、楽しく実習できました。このような自分を受け入れてくださった施設職員の方々、利用者の皆さまには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。